完了報告書兼事後評価報告書

１．基本情報

(１)事業名 住民主体の持続可能な復興まちづくり事業

(２)団体概要
代表理事:八巻 眞由
団体ビジョン:すべての人が生きたい未来を自由に思い描き、語り合い、自らの手でつくり出せる社会
主な事業:人材育成事業・まちづくり事業・コーディネート事業・ 移住定住事業・創業支援事業・災害支援事業

(３)実行団体名　一般社団法人YOMOYAMA COMPANY

(４)設立年月日　2017年4月1日（一般社団法人化2019年1月21日）

(５)新型コロナウイルス対応緊急支援助成（通常枠での追加助成）の有無　無

(６)提出日　2022年4月13日

２．事業概要

(１)実施時期
2020年5月～ 2022年3月

(２)対象地域
宮城県丸森町

(３)事業対象者
・直接的対象者グループ
　丸森町各種まちづくり団体、連携会議参加者、人材育成事業参加者

・間接的対象者グループ
　丸森町民

(４)総事業費(うち評価関連経費)
14,552,222円（うち評価関連経費547,380円）

(５)社会課題
　丸森町では台風19号により死者10名、行方不明者1名、住家被害は5,300世帯中2,374件の被害を受けた。被害額は総額61億円にものぼる見通しとなっている。被災により丸森町は災害前から直面していた人口減少や産業の衰退等、数々の地域課題が今後急速に深刻化していくことが予測される。さらに、復旧復興活動は現在外部支援団体がその大半を担っており、継続的に活動できる地元住民が著しく少ないことも課題である。

丸森町が被災者の生活再建へ向けた行政的支援を行うほか、炊き出し、仮設支援、心のケアなど外部支援団体がそれぞれが独自の活動を行なっているが、支援者間での情報共有や連携の不足が被災者ニーズと支援機関とのマッチングの遅れに影響を及ぼし、横断的な支援ができていない状況がある。また、丸森町では台風の被害状況を受け、行政予算の配分方針について修正を余儀なくされた。ハード面の支援予算を優先的に確保するためソフト事業は大幅に削らざるをえず、支援のムラが発生している。中でも人材育成については、必要性は認識しつつも、限られたリソースの中で、町としても踏み切れない現状がある。

(６)事業実施の目的

人口減少も進行するなかで、復旧復興活動は現在外部支援団体がその大半を担っており、継続的に活動できる地元住民が著しく少ない。これからの長期的な復興まちづくりに向けて、住民の地域参画の機会を創出し、主体的にまちの復興を担うことができる地域の担い手の発掘育成と繋がりの場作りを行うことで、地域内の活動人口増加を目指し、持続可能な復興まちづくり体制を整備する。

(７)短期アウトカムの総括

・協働連携できるネットワークが整備され被災者が抱えている課題を解決するための取り組みが実施されている。
・活動人材が発掘・育成され、課題解決へ向けたチャレンジの芽が育ち始めている
・まちづくり交流拠点が認知され、日常的に相談やニーズが持ちかけられたり、復興活動のハブとして機能している
・30件以上の個人/団体からなるネットワークができ、復興課題解決に向けて協働連携できる基盤が整備できた。
・伊達ルネッサンス塾では、8名の塾生が半年間のセミナーの中で、各々が自身の思いをベースとしたプロジェクトを描き、実際に実践している。それぞれの講座を通してのべ300人以上の住民及び地域内のプレイヤーが学び、個々人が抱えていた思いを実際の行動に繋げたほか、課題に向き合い、活動を応援しあう機運を高められた。その中で、自立的に活動を起こし、自発的に周りと連携しながら今後も継続して丸森町で活動を実践していくことが予想される人材が10名ほど輩出された
・活動人材から一般町民までのべ2,528名以上の利用があった。情報やリソースが拠点に集約され、町民のまちづくりへの興味関心から行動に繋がるきっかけを創出し、実践の場としても活用された。

(８)具体的な活動の内容と写真

《復興コーディネート活動》

被災者支援と復興課題解決に関わる個人/団体の連携促進と課題解決支援のため、連携会議や継続的なヒアリング、必要に応じたサポートを実施した。

（↑「丸森まるまる円卓会議」復興まちづくりについて関心のある住民/団体が集まり
インプットや交流を深めた）

《人材育成》

課題解決活動を起こす個人を増やす機会と、復興活動において有効に機能するスキルアップを図るため、対象者の課題意識の具体性やスキルの状況に合わせた講座の企画運営を行った。

- 伊達ルネッサンス塾

  若者が自分を深掘りながら地域について学び、自分の人生と地域の復興課題の解決を重ね合わせて「マイプロジェクト」を描く社会人向けの地域活動実践講座「伊達ルネッサンス塾」を企画運営した。

（↑自分自身の原体験と接続したプロジェクトを描き、思いを語る塾生）

- 四方山大学

  災害についての基礎知識や防災、復興活動の実践において活かせる具体的な学びを地域コミュニティ全体で共有し、活動人材のスキルアップを図った。

（↑住民からのニーズを拾い上げ、共同開催したセミナーで、避難所運営や防災について学ぶ参加者たち）

《交流スペースの運営》

地域内外の多世代多業種が気軽に集い、繋がることでリソースの集約され、様々なマッチングを生み出すハブとしての機能が必要であると考え、「地域交流拠点　まどい」を運営し、積極的にイベントの実施などを通し交流を促進した。

（↑コミュニティナースによる地域住民の健康相談イベントの様子）

(９)事業管理体制に関する振り返り

代表理事と常勤理事スタッフ1名を中心に、7名による運営チームを構築。各事業担当と、経理バックオフィスで役割分担をして運営を行なった。
資金管理やリスク管理についてはマネジメントチームを組織し、日常的に見直しやリスクヘッジができる管理体制のもとで実施した。

３．事前評価の結果

(１)事後評価の実施体制

・実行団体スタッフ
・一般社団法人RCF

(2)「課題の分析」に関する振り返りと学び

①特定された課題の妥当性
・関係各所（役場・外部支援団体・社協・町民・情報共有会議参加者等）からのヒアリングにより、被災直後には多くの支援が入った一方で時間の経過につれ、住民主体の復興・まちづくり体制への移行が進んでいないという共通の課題意識が見えた。また、ボランティアに参加した住民や若者が地域のために活動を起こしたいという声も聞かれたが、その想いを実行に移すような学びの場や伴走システムがないという課題があった。
・事業終了後の振り返りとして、被災直後に入った多くの支援団体が、時間の経過と新型コロナウィルス感染拡大の影響を受け一斉に撤退したことで、住民の復興への熱量は低下し、住民主体の復興・まちづくり体制への移行が進んでいないという課題があった。
・そこで、すでに芽生えている活動を支援するとともに、活動人材の発掘・育成、そして復興のハブとなる拠点運営に取り組んだ。
・役場職員へのヒアリングでは「まどいは復興の拠点といえる」という評価のほか、「人材育成は大事と感じているが具体的なノウハウもなく、どう育てていいかわからないという課題があった。人材育成の観点が丸森町は弱く、誰に頼んだら何ができるのか、何が課題なのかわからなかった」という声があり、本事業の課題設定と成果について評価を得た。

②特定された事業対象の妥当性
・定期的な外部支援団体、地域活動団体、行政による情報共有はなされていたが、住民に対する情報提供の機会が少なく、住民の想いを汲んで共通のビジョンを描くということができなかったのではないかという課題がみえた。役場や地域活動団体へ寄せられた住民参加型のまちづくり会議設置の要望や、想いを持った住民が積極的に交流できる拠点整備へのニーズが聞かれた。
・事業終了後の振り返りとして、復興や活動への思いはあれど、現実とのギャップに対し行政に不満や要望という形でぶつけるしかなかったなかった住民が、人材育成の事業を経て、自らが小さなアクションを描き、実行するまで変化していく姿が見られた。事業の参加者からは「自分が活動を起こすなんて無理だと思っていたが、自分の思いを言葉にし活動ができてよかった」という声が聞かれた。潜在的に存在している行動意欲を持った人材や、すでに活動を推進している人材、また、これまで地域や復興と関わりあいの無かった住民に対し、フェーズごとの支援を行うことで、個々人の熱量が循環し、結果的に幅広い取り組みが生まれ、復興につながっていくことが証明されたと考える。よって事業対象の妥当性は概ね高いと評価する。

(3)「事業設計の分析」に関する振り返りと学び
・改めてロジックモデルを検討評価し、課題の解決や目指すアウトカムの実現に対し、必要な事業設計であるかを検討した。その中で連携会議とコミュニティスペースにおける属性に対して、それぞれの課題やニーズのスムーズな吸い上げ方法等について再検討した。
・事業開始当初は情報共有会議を軸とした事業設計をしていたが、集客面での苦戦など実際の運営は困難が伴ったことを受け、会議という形式にこだわらない柔軟かつ能動的なコーディネートへ計画変更を行った。これにより活動人材のネットワークの構築がされるようになり、ロジックモデルで描いたように「人材育成事業」「拠点運営」も合わせた、住民のフェーズに寄り添った各事業が連動し、成果を生み出すことができた。アウトプットとしての実施内容には変更があったが、課題の解決や目指すアウトカムの実現に対し、必要な事業設計ができていたと評価した。

④事業計画の妥当性

・概ねのスケジュールは策定していたところではあるが、情報共有会議での意見や、コロナウイルスによる影響に鑑みて必要に応じたスケジュール調整を行った。
・結果として、新型コロナウィルスの感染拡大の影響から計画の遅延やイベントの中止などが多発する状況ではあったが、町内在住者に限ったイベント実施や、オンラインへの切り替えなど柔軟な対応をするこで、大きな変更なく事業遂行することができたことから、事業計画の妥当性は概ね高いものと評価した。

(４)「実施状況の分析」に関する振り返りと学び

（４)-１各アウトプットの達成状況　※別紙1　アウトプット一覧参照

1) 復興コーディネート活動

●2020年　※2020年度までは連携会議を実施

【設定したアウトプット】

年間12回以上の会議を実施している

【達成状況】

・2020年6月から2021年2月にかけて計7回、参加者数延べ157名となった。
・当初は、災害ボランティアセンターとしての支援者中心の情報共有会議として課題の集約と解決策の検討などを行っていたが、住民主体の復興まちづくりには地域住民の参加が必要だと考え、住民参加型にフォーカスした「丸森まるまる円卓会議」として住民の課題意識や興味関心を元にディスカッションや連携が生まれる設計にてオフライン会議を実施した。
・しかし、新型コロナウィルス感染拡大の影響を受けた中でオンラインの情報共有会議をオフラインの円卓会議に移行したこともあり、地域住民の参加が思うように増えなかった。対面での活動が制限され、町内外の活動者の気持ちが下がりつつある中、どのような会議の設計が適切か試行錯誤が続いた。
・上記の状況を受けて、2021年3月実施の中間評価において、振り返りを行い、2021年度からは、住民等へのヒアリングに充て、ニーズを拾い上げる中でコアとなるチームを形成していくことを目的として、事業内容を「連携会議の実施」から「復興コーディネート活動」に変更することとした。

実施日	イベント内容	参加人数						総括
		自治体	支援団体	地域住民	地域外	学生	計	
6月13日	スピンオフ）大学生×情報共有会議	0	17	10		16	43	大学生と地域住民との分科会実施。 6グループごとにアイディア出し実施。
7月13日	第21回情報共有会議	0	11	4		4	19	各団体と、行政からの情報共有。コロナ禍での対応模索。大学生からの アイディア共有。次の災害にむけた防災アイディア出し。
8月3日	第22回情報共有会議	0	12	3		5	20	参加者紹介/情報共有,役場が提示する「復旧・復興計画について」のディスカッション,分科会で個別相談などを行なった。 これまでの会議は過去の情報共有がボリュームが多かったが、今回は「未来のこと」に重点をおき進行した。

9月7日	第23回情報共有会議		6	3		5	14	参加者紹介/情報共有,テーマごとのディスカッション,分科会で個別相談などを行なった。また、次回以降の住民参加型の復興まちづくり会議についても意見交換を行なった。
10月16日	第1回丸森まるまる円卓会議	2	6	7	2	5	22	参加者自己紹介、山元町で継続されている「山元の未来への種まき会議」発足人渡辺氏より情報提供。参加者各自による現在取り組んでいること、できること、やりたいこと、困っていることなどの共有等共有。
12月20日	第2回丸森まるまる円卓会議	1	6	5	2	1	13	ナタリー自己紹介、参加者自己紹介、会議の場の活用＆今後の議題などを出し合った。今回の会場が木造りで第一回目に感じたかたい雰囲気がなく和やかにできた。第一回目に参加して今回不参加だった方にヒアリングをしたい。
2月21日	第3回丸森まるまる円卓会議	0	3	10	10	3	26	今回は釜石市オープンシティ推進室長石井氏とJEBDA鷹野氏をゲストに迎え、釜石市の事例紹介の後感想のシェア、その後グルーピングをし参加者それぞれのやりたいことを出し発表した。
合計		3	61	42	14	39	157	

●2021年

【設定したアウトプット】

のべ20件以上の個人/団体へヒアリングの実施と課題の可視化、5件以上の課題解決支援がされ、20件以上の個人/団体がネットワークされ、課題に対してマッチング可能なリソースが集まる人材バンク機能ができている。

【達成状況】

・のべ28件のヒアリングを実施し、8件以上の課題解決支援（下記表★マーク）がされ、30件以上の個人/団体とのネットワークが構築できた。関係者同士が自発的に連携創出できるまでの環境整備（SNSグループやメーリスの運用等）までは至らなかったが、課題が持ち込まれた際にこちらから必要なリソースをマッチングできるまでの人材バンク機能が整備できた。

実施日	内容	詳細
2021/05/19	自伐型林業	運営サポート ★ファシリテーショングラフィックによる運営支援
2021/06/23	山守チームMTG	運営サポート ★ファシリテーショングラフィックによる運営支援
2021/06/25	コネクトフィーリングス菅野氏と打ち合わせ	＜被災地域（南郷地区）の現状＞ ・コミュニティの悪化→コロナもありバラバラになっている ・災害後、行政・社協の連携、組織体制が変わった ・支えあいセンターの現場報告に漏れがあったように感じる ・現場の状況整理を、誰が主体でやっていくかが曖昧→YOMOYAMAとして多方面と連携しながら復興コーディネーター事業として、南郷エリアのコミュニティ

		再建のサポートを行うことに →★四方山大学にて災害ケースマネジメントを学ぶ講座を企画することでこちらのスキルアップと地域内の環境整備の共有を図る
2021/07/04	南郷地区七夕座談会	運営サポート、仮設住民ヒアリング ★ファシリテーショングラフィックにより住民の声の可視化
2021/07/10	花田仮設座談会	運営サポート
2021/07/14	竹谷地区防災集会	運営サポート
2021/07/22	自伐型林業報告会の運営サポート	今後任意団体を設立することが決定。継続してサポートを実施する。 ★町民に向けて思いを伝わりやすくするための助言、オンライン運営のサポート
2021/07/20	あぶくまの里山を守る会	近況ヒアリング
2021/07/25	南郷地区防災集会	運営サポート ★ファシリテーションによる円滑な話し合いを支援
2021/08/03	上滝地区防災集会	運営サポート ★ファシリテーションによる円滑な話し合いを支援
2021/08/04	五福谷地区ヒアリング	被災現場視察、住民ヒアリング、語り部の会設立に向けた相談対応、マッチング ★語り部の会設立に向けた人材のマッチング
2021/08/12	コネクトフィーリングス	語り部の会設立に向けた相談対応
2021/08/13	株式会社ばとんヒアリング	災害公営住宅のコミュニティ再建に向けた相談対応
2021/08/25	オンラインサポート	四方山大学「災害ケースマネジメント」にて婦人防火クラブ会長にPCの貸し出し、zoomのレクチャーを行った。 ★地域のキーマンがオンラインツールを使えるように支援することで今後の参加機会の拡充に繋げる
2021/08/26	金山仮設住宅サロン	運営サポート、仮設住民ヒアリング
2021/09/01	コネクトフィーリングス	語り部の会設立に向けた相談対応
2021/10/10	五福谷地区竹灯籠慰霊祭	運営サポート
2021/10/24	金山サロンメンバーのランチ会	睡眠薬がないと眠れないとの話が聞こえてきた。
2021/11/05	OBJヒアリング	・現在は仮設を出てからの支援活動に重きを置いている。サロンに参加する方は固定化されていて、元気な人たちが出てくる。仮設内の元気な人たちが、外に出てこない方々の見守りをできるように習慣づけたい。 ・来年度も仮説見守りの事業継続の方向で役場からのオファーはあるが、公営住宅のコミュニティ再建は別の団体（ばとん）が受けているので連携体制が見えない現状。
2021/11/04	まなびの森ヒアリング	・仮設住宅の集会所にてこどもたちの学習支援を実施。 ・高校になった途端、支援が途切れてしまうので、まどいに高校生が集まっていることの重要性を評価していただいた。今後の連携体制を検討していく。

2021/11/20	自伐型林業ヒアリング	・任意団体の設立に向けて準備中 ・自走に向けて、助成金申請などで活動サポートしていく。
2021/11/27	花田仮設収穫カフェ	出張まどい、運営サポート
2021/12/02	自伐型林業運営MTG	運営サポート
2021/12/19	神戸大学サロン	まどいでのサロン運営サポート
2021/12/24	齋藤百合子さんヒアリング	ママ向けの防災講座を実施したい→四方山大学にて共同企画 ★住民の活動意欲を実現に繋げる。
2021/12/24	株式会社ばとんヒアリング	支援者情報共有会議を実施したい→以前の連携会議の様子について共有
2022/01/26	丸森見守り支援ネットワーク会議	各団体との顔合わせ、情報共有、ヒアリング
2022/02/12	女子重機隊打ち合わせ	四方山大学共催に向けたヒアリング、サポート

・その他、相談やマッチングとして以下のような取組を行った。

	来訪日	性別	年齢	居住地	属性	相談内容
1	4月6日	女性	40代	丸森	丸森の復興活動メンバー	4/10復興イベントがオンライン開催されるのに伴い、ZOOMの使い方などをサポートしてほしい。また、事前に練習がしたい。 →まどいにて佐藤が4/10にサポート対応。4/8夜に練習サポートを行った。
2	4月7日	男性	20代	近隣市町	柴田町地域おこし協力隊	地域交流拠点で、特技(タイ料理)を活かしたイベントを丸森で開催させてほしい。 →6/20にまどいでイベント開催
3	4月22日	女性	40代	丸森	丸森町民（被災,起業希望）	2021年3月に相談を受けた、カフェ開業のための試食会の実施。 →4/22まどいをレンタルし、試食会を実施。スタッフ3名、伴走者1名が参加。
4	4月23日	女性	20代	近隣市町	角田市地域おこし協力隊	地域おこし協力隊の活動についての悩み相談。丸森のネットワークでサポートできるよう調整。
5	4月26日	女性	30代	丸森	丸森町地域おこし協力隊	町内の活動の広報誌配布の件で、伊具高校と繋いでほしい
6	5月15日	男性	20代	その他		今後のキャリアについての相談。
7	5月22日	男性	？	その他	移住希望者	7月に筆甫へ移住予定。丸森町での暮らしについて。→定期的に相談
8	5月29日	男性	？	？	伊具高校教員	生徒の中に将来パティシエになることを希望している子がいる。彼のキャリアアップのためにまどいでお手伝いができないか。

9	6月22日		20代	その他	大学生グループ	丸森の災害をテーマにした作品をつくるために丸森の災害の話を聞かせて欲しい→八巻から当時の体験と現状を共有
10	6月25日	女性	40代	丸森	復興支援団体コネクトフィーリングス	現在の活動についての共有と連携についての相談→南郷エリアのコミュニティ再建について連携していく
11	7月	女性	40代	丸森	丸森町民（被災,起業希望）	お店のオープンにむけた経験をつむために、定期的な試食イベントの実施をしたい。→まどいのスタッフとして勤務。 試食イベントの実施をサポートしていく。
12	7月	女性	40代	丸森	復興支援団体コネクトフィーリングス	四方山大学主催にむけた打ち合わせ
13	7月	女性		近隣市町	他地域で地域活動に取り組む女性2名	丸森に関わるきっかけを探している→まどいの1日ママ制度にお誘いする
14	7月14日	男性	50代	丸森	元食堂経営者	お店の管理者の変更により無くなり、地域の嫌なところも見え、丸森に居続けるのが嫌になってきている。お店のファンが沢山いることを伝え、まどいで「幻食堂」として今は無き飲食店の復刻デーを設けることを提案。
15	7月23日	ー		そのほか	福島県内で高校生事業にとりくむ団体	高校生マイプロジェクトについての意見交換→今後定期的に情報交換していく
16	8月4日	ー		宮城県内	デザインチーム	広報媒体について、デザインについての相談。
17	8月4日	女性	10代	その他	ロボットによる交流の研究にとりくむ大学生	ロボットとの交流プログラムを企画したい。→高校生との交流をコーディネート
18	9月18日	女性	50代	その他	有名企業職員	発災後以前からのつながりでボランティアに来た。会社として丸森町内での事業連携できないか
19		女性	50代	丸森	丸森町内農家	まどいのチラシ配布の提案。恩送りカードのアイディア交換。
20		ー	10代	その他	神戸大学ボランティア団体	花田仮設でクリスマス周辺に活動ができないか企画についての相談 →同じ日程で神戸大学と東北大学の学生ボランティア交流会をまどいで実施

21	10月13日	男性	20代	その他	映画スタッフ	ドキュメンタリー映画を撮りたい。→取材対応。町内の案内。
22	10月2日	ー		近隣市町	地域おこし協力隊数名	まどいの事例について知りたい
23	10月	女性	30代	丸森	丸森町内、事業者	町内のイベントにて子供向けに自然体験活動の企画ができないか→スタッフが出店
24	10月30日	男性	50代	丸森		台風で被災し金山から丸森に引っ越し、コロナで町内活動が無く孤立 →スナックにて周辺地区住民とマッチング
25	11月18日	女性	40代	近隣市町	伊達ルネッサンス塾塾生	糸活動を個人として行っている。仙南地域のカフェなどを使って、糸活動を広げていきたいと考えているのだが、まどいでも実施できないか。→イベントの実施
26	12月24日	女性	40代	丸森	丸森の復興活動メンバー	丸森で女性を対象にした防災講座を実施したいが、資金面、企画力ともに不足している。→四方山大学の枠組みで共同企画する。
27	12月24日			その他の宮城県内	丸森の復興事業に関わるファシリテーター	来月町内で災害情報共有会議を実施したいので協力/参加してほしい→会議出席
28	12月上旬		10代	その他	ロボットによる交流の研究にとりくむ大学生	丸森でのまちづくり関連の手伝いをしたいとのこと。ロボット研究にて、地元民との交流希望。→まどいにて機会提供
29	12月20日			その他	来春から丸森移住予定の3人	まちづくりの協力をしていきたい。→情報交換。スナックのマスターとしてのイベント企画を提案。
30	12月上旬		10代		マイプロジャーニーメンバーの高校生	発表会へむけイベントの飾り付けのための素材探しを丸森町内でしたい→地元の町民にまち案内を依頼。協働し作業した。
31				丸森	自伐型林業メンバー	自伐型林業のフィールドとなっている「親林」の活用方法を考えたい。→親林にて森探検＆ネイチャーゲーム会を伊藤が実施
32	1月26日	女性	？	丸森	丸森町民	高齢者の方に対して誕生日会を開催してあげたい（丸森に戻って5年目）
33	2月9日	男性	50代	その他の宮城県内	左官職人	丸森の文化財である齋理屋敷の修復のために藁が必要。周辺で手配できないか。→農家とマッチング

2)人材育成

【設定したアウトプット】
年6回以上のセミナーを実施し災害に関する知識や課題解決のための学びを得る環境が認知され、毎回5名以上の参加者が集まる
【達成状況】
新型コロナウィルス感染拡大の影響により、オフラインでの開催が思うように実施できない状況にあったが、オンライン講座への切り替えなど柔軟に対応し、下記の通り、多くの住民が参加し、災害に関する知識や課題解決のための学びを得る機会を創出できた。

●伊達ルネッサンス塾 （※2021年度のみ）
・対象者：丸森町住民及び近隣地域から計8名が継続的に参加。
・実施内容：ゲスト講師によるセミナー、マイプロジェクトを深めるワーク、プレゼンテーション、相互フィードバック、フィールドワーク、交流会　等
・実績：セミナー実施5回+フィールドワーク1回+発表会1回　参加者累計100名以上

・伊達ルネッサンス塾取組内容（2020年度）

実施日	テーマ	会場	ゲスト	参加人数				内容
				塾生	職員	その他	計	
7/17	プレセミナー 自分なりの地域との関わり	オンライン	渡辺一馬氏（一般社団法人ワカツク代表理事） 永谷由美氏（伊達ルネッサンス塾OB）	ー	2	10	12	①団体と伊達ルネッサンス塾の紹介 ・ゲストトーク ①渡辺一馬氏（一般社団法人ワカツク代表理事） ②永谷由美氏（伊達ルネッサンス塾OB／コミュニティーナース） ・「自分なりの地域との関わり」についてのクロストーク
7/31	第1回セミナー 自分を知ろう	丸森町	ー	5	5	7	17	半年間を共にする塾生同士の関係を深め、活動の土台となる思いを明確にするため、人生グラフの作成と発表、価値観の探求のワークを実施した。台風災害や何気ない日常など、それぞれの思いの原体験をシェアしモチベーションを高めた。 ・個人ワーク①自己の探求 ・個人ワーク②価値観の探求とアクションの設定

8/21	第2回セミナー ビジョンを描こう	山元町→緊急事態宣言を受けオンラインで開催	岩見圭記氏 （山元の未来への種まき会議） はじまるしぇ実行委員のみなさん	5	2	3	10	隣町でありながらなかなか交流のない山元町で震災後活動している2団体の取り組みを聞き、自分自身でできること、目指すビジョンを考えた。 ・ゲストトーク①岩見圭記さん（地元への思いや震災直後～今までの活動、未来への種まき会議の開催によって生まれたつながりや変化） ・ゲストトーク②富塚啓人さん（伊達ルネ塾2期生が立ち上げた「山元はじまるしぇ」の「山元はじまるしぇ」立ち上げとその後の進展。富塚さんご自身の思いや活動のきっかけ、伊達ルネ塾での体験について） ・マイプロジェクトの発表
9/11	第3回セミナー マイプロジェクトを具体化しよう	南相馬小高地区	西山里佳さん （marutt株式会社）	7	2	4	13	南相馬市小高地区は、福島原子力発電所から20キロ圏内にあったため事故後全域に避難指示が出され、一時は住民がいなくなった。丸森から車で1時間ほどの距離でありながらなかなか知る機会のない場所で、実際に街を歩きながら、「持続可能な町」や「自分にできる具体的なアクション」を考えた。 （フィールドワーク） ・小高駅集合・町の概要を説明 ・小高駅前通り散策 ・OPVに立ち寄り施設内見学 （本編） ・塾生の発表 ・ゲストトーク　西山里佳さん（出身である福島に復興で関わりたいと思いを抱いた発災当時～移住のきっかけになった事業と活動について。新しくオープンした拠点と自身のプロジェクトへの向き合い方の変化など） ・グループトーク

26	フィールドワーク	丸森町	ー	3	5	5	13	丸森の高校生向けのプログラムマイプロジャーニーとの合同企画。世代を超えて学び合う企画として、未だ台風災害の爪痕が残る大張地区を中心に、古くから続く取り組みや、近年生まれた活動など、地域に根ざした様々なマイプロジェクトの現場を巡った。 10:00　丸森駅　集合 ・スローバブックス -イントロダクション -自己紹介 -佐藤浩明氏から（スローバブックス起業の経緯や思いについて） -佐藤路代氏から（台風災害後の自伐型林業の取り組みについて） ・佐藤ファーム -養蚕農家の作業現場の見学 -佐藤靖氏から（養蚕の歴史や家業を継ぐ決断や思いについて） ・開業準備中のの古民家レストランEs -古民家改修現場視察 -新村氏から（事業構想や立ち上げの思いについて） -昼食 ・沢尻の棚田 -沖澤から（棚田の概要説明と現在の取り組みの紹介） ・地域交流センターなんでもや -住民出資型の地域商店のはじまりについて -MK fitnessのみなさまから（始めた思いと現在の取り組みについて） ・スローバブックス -振り返り 16:00　丸森駅　解散

10/9	第4回セミナー アクションを起こそう	角田市	渡辺一馬氏 （一般社団法人ワカツク代表理事）	4	1	4	9	森林組合代表である佐藤さんにご協力いただき、森林のフィールドワークを盛り込んだ。100年先を見据えた林業の世界に触れ、地域の防災・持続可能性・今自分たちにできることを考えた。 （フィールドワーク） ・かくだもうそう会議（小さく着実にアクションを積み重ねてきた活動の紹介、塾生と同年代だからこそのアドバイス） （本編） ・森林のフィールドワーク ・塾生の発表 ・ゲストトーク　渡辺一馬さん（活動の原体験、地域への思い、学長に言われた「自ら、課題を解決せよ」というメッセージ、現在の活動について）
11/20	第5回セミナー マイプロジェクトを伝えてみよう	丸森町	ー	5	4	2	11	塾生＋事務局のみのクローズな会で徹底的なプレゼンのブラッシュアップをおこなった。 塾生同士で活発な意見交換やフィードバックを行った。
12/18	発表会	丸森町	西塔大海さん （合同会社合作）	6	3	47	56	高校生～社会人までがそれぞれのマイプロジェクトをプレゼンと展示により発表した。 ①オープニング ②基調講演 西塔大海氏 ③伊達ルネッサンス塾塾生発表 ④伊具高校による発表 機械系列（消毒液スタンド作成の活動や機械系列の特徴について） 福祉系列（防災についての調査、避難所運営についての実践） ⑤MYPRO JOURNEY発表 ⑥クロージング・ブース展示
合計				35	24	82	141	

・伊達ルネッサンス塾　成果発表会

＜塾生一覧＞　名前/年代/出身or居住地/プロジェクトテーマ

・齋藤信一　60代　丸森町　災害ボランティアに参加してくれた方々と丸森町との縁を繋ぎ直すプロジェクト

・荒茂美　50代　丸森町　子育て世代のサポートと廃校になる小学校の利活用プロジェクト
・照井麻美　20代　丸森町　自分らしい生き方を体現するプロジェクト
・井上和正　20代　丸森町　丸森町で多世代交流を生み出し若年層の郷土愛を醸成するプロジェクト
・佐藤希　20代　白石市　自分のスキルを活かして仙南地域のリソースの魅力を引き出すプロジェクト
・久保田治美　40代　村田町　糸紡ぎを通したコミュニティ活動プロジェクト
・平間美香　20代　白石市　地域交流を生み出すゲストハウス新築プロジェクト

丸森町の委託事業である高校生マイプロジェクトとの合同発表会として実施し、社会人から高校生まで多世代が一堂に会してそれぞれのマイプロジェクトを発表しあった。町長はじめ町議会議員や行政職員、地域住民の参加も多数あり、発表後に設けた発表者と来場者が交流できる個別ブース展示の時間には、どのブースも人の流れが途絶えないほど積極的な交流が生まれていた。互いを応援しあう雰囲気も醸成され、ひとりひとりが地域で主体的なチャレンジを実践しようとする機運を高められた機会となった。

●四方山大学
・対象者：丸森町民及び近隣市町村在住者のうち復興活動/地域活動の実践者や興味関心のある者
・実施内容：活動の促進に繋がる知識やスキルを学べる講座やワークショップ
・実績：2020年　セミナー実施6回、参加者数102名以上、2021年　セミナー実施5回、参加者数　80名以上

・四方山大学取組内容（2020年度）

実施日	テーマ	講師	参加人数			総括・内容
			男性	女性	計	
6月27日	まどいオープニングイベント（コミュニティとは、「地域で場を結ぶ」ことの意味について）	信岡良亮氏	8	10	18	コロナ禍においての場のあり方
8月31日	円坐（ファシリテーション力を身につける）	橋本久仁彦氏	3	9	12	円坐守人としての心構え 聴くというスキル
11月3日	オンラインツールを使いこなす講座（zoomでのオンラインファシリテーション、SNSでの友好的な発信法）	青木氏			25	オンラインファシリテーションを行うための具体的なスキル講座、こんなときどうするQ&A
11月21日	beの肩書き（自分のありたい姿を肩書きにする方法）	内藤千裕氏			15	Beの肩書きを通して自分の価値観・なりたい姿の掘り下げ オンライン開催によってオンラインリピーターが生まれつつある。 まちづくり・コミュニティなどへの関心領域が近いので、移住定住ツ

						アーなどに呼び込める可能性はある。
2月28日	心をほぐすためのコミュニケーション講座	八巻寛治氏	3	5	8	「子どもへの心のケア」をテーマに、子どもの成長段階における必要な支援、子どもを取り巻く社会課題の現状、求められる心のケアについて、心をほぐすコミュニケーションワーク
3月20日	SDGs	黒井理恵氏	11	13	24	SDGSゲームを通し、世界システムとの接続、持続可能なまちづくりへ向けた個人のアクションの重要性について
合計			25	37	102	

・四方山大学取組内容（2021年度）

実施日	イベント内容	講師	参加人数			総括
			男性	女性	計	
8/25	YOMOYAMA COMPANY/地域支援団体 Connect Feelings共催 災害支援のプロに聴く！「災害ケースマネジメント勉強会	菅野拓氏	7	4	11	災害ケースマネジメントの意義や、平時からの行政との連携体制こそが緊急時に役立つからこそ、主体的な市民活動や行政へのアプローチが必要であることを学ぶとともに、支援者と住民の意見交換も行った。 ・生活再建にむけた支援制度について ・住民自治組織に求められる役割と課題 ・次なる災害に備えて行うべきこと
11/25	四方山大学2021特別講座 「SNS情報発信講座（Instagram・facebook 基礎編）」	スズキアン氏	6	9	15	事業に手一杯になり、情報発信まで手が回らない活動者に対し情報発信の仕方を学ぶ機会を提供し、活動の意義や賛同者の獲得に必要なアプローチ方法を考えた。 ・運用目標の設定方法 ・SNSごとの特徴と好まれる文体・写真 ・ハッシュタグの作り方、考え方
12/1	四方山大学2021特別講座 「SNS情報発信講座（Instagram・facebook 運用編）」	スズキアン氏	6	5	10	事業に手一杯になり、情報発信まで手が回らない活動者に対し情報発信の仕方を学ぶ機会を提供し、活動の意義や賛同者の獲得に必要なアプローチ方法を考えた。 ・無理なく継続的に発信する秘訣 ・インサイトの分析方法

実施日	イベント内容	講師	参加人数			総括
			男性	女性	計	
						・フォロワー、シェア拡散の増やし方
3/12	四方山大学特別講座「まるもり防災2DAYs」 ⌘DAY「防災ママカフェ＠丸森」	かもんまゆ氏	9	18	27	家族を守るママの視点から、防災のための備えと心構えを実際に起きたエピソードも交えながら学んだ。 ・自宅や主要施設等の災害リスクの調べ方 ・実際の災害で起きる正常性バイアスのリスク ・今すぐにできる防災/備災スキル
3/13	四方山大学特別講座「まるもり防災2DAYs」 ⌘DAY２　「避難所運営シミュレーションゲーム　さすけなぶる」	天野和彦氏	9	8	17	震災時の避難所運営にて実際に起きた事例を元に作られたワークショップを通して、非常時に不特定多数が集まる場面において人権を脅かすことなく最適解を探す体験から、災害時における避難所のリアルや意思決定のプロセスを学んだ。 ・避難所運営の過去と現在 ・海外の避難所事例 ・東日本大震災での事例 ・ワークショップ体験
合計					80	

3) 交流スペースの運営

【設定したアウトプット】

週4日の運営の中で、イベント企画8回/年、相談対応12件/年、仮設住宅への出張喫茶2回/年を行った。新型コロナの影響により、合計1.5ヶ月の営業休止、更に1.5ヶ月の時短営業をせざるを得ない時期があったが、開業中は原則週4日を営業し、延べ252日、2,528名の利用（1日あたり平均10人）となり、世代・セクターを超えた多様な交流が生まれている。

【達成状況】

●利用者数

2020年10月～2021年3月の昼営業＋2021年夜営業（休眠対象範囲）

・営業日合計　252日　・利用者合計　2,528名

参考）休眠対象外を含む、立上げ後からの実績

　2020年7月～現在

・営業日合計　276日　・利用者数合計　3,243名

●イベント企画/相談対応等

・2020年

仮設住宅での出張喫茶の実施までは至らなかったが、週3日（途中から週4日）の拠点運営、イベント企画7回、相談対応20件を達成することができた。

・2021年
仮設住宅での出張喫茶はコロナの影響を受け1回の実施となったが、他3回出張型で住民コミュニティの集まりに出向き喫茶提供を行った。週４日のコンスタントな拠点運営、イベント企画25回以上、相談対応約30件を達成することができ、多様な交流を生み出せている。

・イベントでは、「地域交流拠点まどい」自体を知ってもらうために、オンラインでのお試しスナックやゲストママを呼んでのイベントなどから始めた。その後、日替わりママのインタビュー企画などを進めるに連れて徐々に認知度が広まり、地域住民や復興支援活動の関係者からの持ち込み企画が続いた。習字やお茶会など、参加者との交流を通じて生まれたテーマに基づき、多様なイベントが実施できたことでその都度新たな利用者の獲得につながった。
・2021年度は、カフェオープンを希望する伊達ルネッサンス塾OBが、まどいの一角を使ってコーヒー提供のチャレンジショップを延べ15回出店するなど、育成された人材のキュレーションの場ともなった。
・また、復興コーディネート活動により団体設立支援やスキル面のサポートを行った自伐型林業プロジェクトでは団体の今後の方針について検討する重要なミーティングの場となったり、伊達ルネ卒業生のマイプロジェクトを継続していくためのスタートアップとして糸紡ぎカフェやオリジナルイベントを開催するなど、プレイヤーたちが小さな一歩を実践する場として機能している。

2020年度　イベント				
月	日	タイトル	参加者	総括
7月	17日	お試しスナック	8	オンラインスナックをプレオープン。 イベントニーズのヒアリング、オンラインでの活動近況報告を実施。
8月	1日	スナックみゆき	9	作家の小野美由紀さんをゲストに1日ママスナック。 トークテーマ「作品を書く、伝えるということ」
8月	15日	ママ紹介イベント：ナタリー	12	日替わりママのインタビュー企画。店内とライブ配信でひとりずつママを紹介していく
8月	30日	持ち込み：習字イベント	5	すずか持ち込み企画。習字教室。
9月	5日	持ち込み：お茶会イベント	7	丸森産のお茶をつくり、お茶会企画の持ち込み
9月	19日	持ち込み：大学生オンラインサロン	10	絵しりとり、フリートーク
9月	26日	持ち込み：大学生オンラインスナック	6	絵しりとり、フリートーク
10月	17日	持ち込み：ギブミーベジタブル	24	野菜をもちよって、食事会の実施
11月	28日	夜の保健室	4	コミュニティナースを呼んでの健康相談
12月	19日	年末大手相	10	手相鑑定師翡翠の風とコラボ(1D or F)
12月	26日	大掃除＆感謝祭	8	常連さんと共にまどいの大掃除とお振舞い
2月	19日	手相スナックタイム	11	手相鑑定師翡翠の風とコラボ(1D or F)
2月	20日	手相カフェタイム	10	手相鑑定師翡翠の風とコラボ(1D or F)
3月	28日	書道イベント	3	年度ふりかえりとともに書道を実施

2021年度　イベント				
月	日	タイトル	参加者	総括
4	22	試食会	10	丸森で開業希望の主婦の方のプロジェクトを応援するため、コンテンツとなるパンケーキを試作しカフェでの試食会を実施した。
6	20	プロと一緒に作る！タイ料理を楽しむ会	17	元タイ料理研究家を講師に招いてイベントを実施。比較的若い世代の参加が多く見られ、参加者同士の交流も盛んに行われた。 参加者アンケートを見ても満足度は高かった。
9	11	カフェかわべ	―	まどいの一角を使った伊達ルネOBによる出店（チャレンジショップ）
9	18	カフェかわべ	―	まどいの一角を使った伊達ルネOBによる出店（チャレンジショップ）
9	25	カフェかわべ	―	まどいの一角を使った伊達ルネOBによる出店（チャレンジショップ）
10	2	カフェかわべ	―	まどいの一角を使った伊達ルネOBによる出店（チャレンジショップ）
10	9	カフェかわべ	―	まどいの一角を使った伊達ルネOBによる出店（チャレンジショップ）
10	16	カフェかわべ	―	まどいの一角を使った伊達ルネOBによる出店（チャレンジショップ）
10	23	カフェかわべ	―	まどいの一角を使った伊達ルネOBによる出店（チャレンジショップ）
10	30	カフェかわべ	―	まどいの一角を使った伊達ルネOBによる出店（チャレンジショップ）
10	30	パンケーキ試食会	―	丸森で開業希望の主婦の方の支援。大変好評で新規の顧客獲得の機会になっている。
11	6	カフェかわべ	―	まどいの一角を使った伊達ルネOBによる出店（チャレンジショップ）
11	10,11	お手相どうでしょうvol.3	10	昨年度も実施し、参加者から好評の声が多かった伊達ルネッサンス塾OBによる手相占いイベント。 リピーターも多く、人気企画となっている。
11	27	カフェかわべ	―	まどいの一角を使った伊達ルネOBによる出店（チャレンジショップ）
12	4	カフェかわべ	―	まどいの一角を使った伊達ルネOBによる出店（チャレンジショップ）
12	18	カフェかわべ	―	まどいの一角を使った伊達ルネOBによる出店（チャレンジショップ）
12	24	タイ料理、手打ち蕎麦イベント	16	元タイ料理研究家の方を招き、タイ料理と手打ちそばを楽しむイベントを実施。 普段まどいを訪れない層の利用もあり満員御礼となった。
12	25	まどい大掃除＆大感謝祭2021	9	年末大掃除をイベントとして実施。常連の参加も多く、拠点を支えるコミュニティができていることを実感した。

1	22	糸紡ぎカフェ	8	伊達ルネ塾生と丸森町内の糸活動をされている方たちとをマッチングし協働で開催。 第1回の今回は広く参加者を募るのではなく、近隣でお声がけできる人たちのみで開催。今後も定期的に開催していく方針。
1	23	自伐型林業ミーティング	12	MTGの会場として提供。運営のサポートを行った。
1	13	MARUMORI PROUD	9	伊達ルネッサンス塾7生のマイプロのスタートアップ企画。1ヶ月間の企画伴走と集客協力を行ない無事開催することができた。 コロナの影響もあり思うように集客はできなかったが、確実に次回につながる内容となった。
1	15	カフェかわべ	―	まどいの一角を使った伊達ルネOBによる出店（チャレンジショップ）
1	22	カフェかわべ	―	まどいの一角を使った伊達ルネOBによる出店（チャレンジショップ）
2	12	カフェかわべ	―	まどいの一角を使った伊達ルネOBによる出店（チャレンジショップ）
2	30	簡単写真教室	9	カメラマンを講師に招き、カフェで写真を撮る上でのコツをお伝えするイベントを開催した。 若者からご高齢の方まで幅広い参加があり、「カメラ」という共通の話題で大変盛り上がった。

（4）-２評価小項目ごとの評価結果

・評価計画に定めた評価小項目は以下の⑤～⑦である。評価結果は次のとおり。

評価項目	評価小項目	判断基準		評価結果、考察
		判断方法(指標等)	判断基準値(目標値/状態等)	
⑤実施状況の適切性	計画を具体化しスケジュールに沿って実施できているか	プロジェクトシート 進捗報告書	ワークショップ参加者の合意	新型コロナウィルス感染拡大の影響を受け、対面での企画が制限され、ほぼすべての事業においてスケジュールの変更を余儀なくされたが、オンラインに移行するなどの対策を行い、途切れることなく事業を実施することができた。
⑥知見の共有、活動の改善	取組により得られた知見を活動の改善に活かしているか	プロジェクトシート	ワークショップ参加者の合意	住民ニーズのヒアリングを行い事業計画の見直しを実施し、「連携会議」については「復興コーディネート活動」に変更し、より地域の実情に沿った活動に変化させる形で知見を活動改善に活かすことができた
⑦組織基盤の強化	団体運営の基本規定や運用体制などを構築できているか	ガバナンス・コンプライアンスに関する規程の整備	事業期間中に整備すべき規程がすべて整備されている	規程の整備は随時実施し、事業期間中にすべて整備完了と公表を行うことができた。会計処理に関しては、団体内のチェック

				体制のフローが構築し定期的な手続きを行うようにした。

(4)-3 事業実施における成功要因と課題

拠点運営では利用者の主体性を引き出すコミュニケーションや共同企画の提案などを行うことで、コアなファンを獲得するほか、幅広いネットワークが構築され、さまざまなマッチングを生み出すことができた。また地域の大人が中高生の飲食代金を先払いできる「恩送りカード」のシステム導入など、飲食店という形態をベースとした様々な仕掛けをつくることで、地域交流拠点としての認知を高められ、様々な相談を持ち込まれるような環境を作り出すことができた。

人材育成事業については、地方における学びに対するハードルの高さという壁から集客に苦戦する面もあったが、個別声がけし、粘り強く働きかけることで受講者を確保することができた。さらに受講者が半年間の学びを地域住民に対し発表する場は、弊社の事業である高校生を対象とした人材育成塾との合同企画として開催し、地元高校や役場を巻き込んだイベントにすることで、地域に対し広く本事業の意義を示し、全体として復興活動への意欲を高めることができた。また活動人材へ向けたスキルアップの機会提供では、住民と共にセミナーを企画運営形式を取ることで、学びに対する主体性を引き出し、熱量ある場づくりを行うことができた。

さらに、コーディネート活動では活動人材に対し細やかなヒアリングを行い、活動に寄り添い、上記の二つの事業とも連動しながらネットワークを構築し、横断的なサポートを行うことで活動を推進することができた。

(5)「アウトカムの分析」に関する評価

(5)-1 各短期アウトカムの達成状況

①復興コーディネート事業

【設定した短期アウトカム】

課題解決に取り組む人材同士が繋がり、協働や連携に必要なネットワークの基礎ができ、住民の主体性を中心とした復興の連携が生まれている。

【達成状況】

・のべ28件以上のヒアリングを実施し、8件以上の課題解決支援を実施した。住民の主体的な活動と協働連携による復興課題解決に繋がる30件以上の個人/団体からなるネットワークの基礎ができている。

・活動開始当初は「復興コーディネート事業」そのものがあまり認知されておらず、ニーズの収集や復興課題の可視化に苦労したが、2020年度に3回実施した情報共有会議「丸森まるまる円卓会議」では、地域内外から丸森町の復興まちづくりに興味関心のあるメンバーが参加し、ネットワークを広げることができた。

・丸森町では台風災害後に新しく設立された団体が4つあり、そのうちの3団体の活動に継続的支援を行なった。それぞれ思いはあれど団体運営の経験は少なく、会議のファシリテーションやイベントの運営協力等、活動支援によってそれぞれの団体がアプローチする復興課題の解決に寄与することができたと考える。

・また、復興コーディネート事業が認知されるにつれて徐々に色々なニーズが寄せられるようになり、適宜リソースのマッチングや共同企画の実施などの実践につなげることができた。具体的には、ファシリテーションや事業運営面でのスキル支援、オンラインツールの利用サポート、マッチング要請、相談対応等の活動が多く、先方の独自リソースだけでは実現が難しいことを、支援を行うことで活動促進につなげられた事例が多くあった。また、ファシリテーションやオンラインスキルなど、こちらの支援によって手法を理解し、その後は自立的に取り組めるようになる等の変化もみられた。
・地域の中で活動している個人/団体はそれぞれ多くの課題を抱えながら奮闘しているが、災害復興活動において日常的な情報交換や連携は必要不可欠である一方で丸森町にはこれまで中間支援を担う機関が無く、当活動において中間支援的機能も果たせたことで地域全体の連携体制の基礎が構築できたことは、 住民主体の持続可能な復興まちづくり体制の整備に繋がる重要な取り組みだったと感じる。

★事例①自伐型林業推進プロジェクト
台風19号時、死者をも出した丸森町の土砂災害発生現場の98%が人為的に森林開発や皆伐を行なった森であったことが調査の結果判明したことを受け、人の命を奪うことのない安心安全で持続可能な森づくりを目指して「自伐型林業」を推進する活動が生まれた。丸森町民を中枢メンバーとして団体が組織され日々議論が行われたが、課題意識はあれど、団体運営やプロジェクト運営の経験があるメンバーが少なく、発足当初は会議のファシリテーション支援を数回行なった。論点の整理やゴール設定などを一緒に行い、またファシリテーショングラフィック等の技術も用いたことで、話し合いをスムーズに行うことができたと好評をいただいた。その後は地域向けの報告会にてどのように設計すれば団体の思いが届きやすくなるかなど、企画から関わり助言を行いながら、当日はオンライン配信の技術支援を行い、会場で参加できない方々にまで活動を届ける支援ができた。今後は継続的な活動を行うため、団体を設立する運びとなり、団体設立のサポートや助成金申請等の事務手続き支援等を継続的に実施している。
★事例②コネクトフィーリングス
台風災害後に発足した被災者支援団体。町外在住（祖父母の家が丸森にあり被災）の女性が1人で立ち上げた団体ということもあり、設立当初から定期的にヒアリングを行いながら状況に合わせたサポートを行なってきた。具体的には、町内の婦人防火クラブより当時のことを振り返りながら今後の防災につなげられるような機会を持ちたいとのニーズに対して共に内容を設計し2回の防災集会を実施した。当日はファシリテーションを担い、「はじめてあの日のことを話すことができた」「男性ばかりの場では発言しにくいが、女性だけの場で話しやすかった」等の好評をいただくことができ、防災への意識が高められる機会になったと考える。また被害の大きかった南郷地区では地元の自主防災組織との連携で数回座談会が実施され、当日の運営サポートを行なった。南郷地区では語り部の会設立に向けた動きも生まれ、今後も継続的に支援を行う。

竹谷地区婦人防火クラブ防災集会の様子

②人材育成
【設定した短期アウトカム】
活動人材が発掘・育成され、課題解決へ向けたチャレンジの芽が育ち始めている
【達成状況】
・復興まちづくりを担う人材の発掘・育成を目的とした伊達ルネッサンス塾では、8名の塾生が半年間のセミナーの中で、漠然と描いていた町や復興に対する思いを確かなものにし、各々が自身の思いをベースとしたプロジェクトを描き、実際に実践している。
・各回のセミナーでは積極的に丸森町以外の会場でも開催し、他地域の事例を学び、広域のネットワークを獲得できるよう設計した。この広域での学びを通して、塾生は幅広い知見を身につけ、実際の活動を推進することにつながったほか、東日本大震災で被害を受けた沿岸部のノウハウが、丸森での活動に活かされるという場面も見られた。
・また四方山大学については、すでに活動を実践している人材がより取り組みを推進させるためのスキルアップの学びや、住民が広く防災知識を学べる場づくりを提供したことで、学びを通じたコミュニティを構築することができた。
・さらに、災害を契機に活動を始めた住民の中には、目の前の活動で手一杯になり、疲弊し、孤独を抱えているケースが散見されたが、こうした学びの機会の提供により、普段関わりのない層も含め、課題感や熱量を共有することが癒しとなり、活動の促進に寄与することができたと考える。
・それぞれの講座を通してのべ300人以上の住民及び地域内のプレイヤーが学び、個々人が抱えていた思いを実際の行動に繋げたほか、課題に向き合い、活動を応援しあう機運を高められた。その中で、自立的に活動を起こし、自発的に周りと連携しながら今後も継続して丸森町で活動を実践していくことが予想される人材が10名ほど輩出された。

事例①齋藤信一
丸森町の被災を機に初めて災害ボランティアに参加し、地域住民のボランティア参加が著しく少なかったことがきっかけとなり、地域に対しての課題意識を持つようになる。しかし、その課題意識をどう扱えば良いか分からず、行政批判という形で各所に陳情を重ねていた。第1回目の丸森まるまる円卓会議に参加された際にも批判的な言動が目立ったが、地域交流拠点のソーシャルスナックに誘い、少しずつ対話を重ねながら「行政批判ではなく今自分にできることは何か？」という視点を持てるよう接したことで、徐々に主体性が育まれていった。次第に行政批判的な発言も減っていき、自分の興味関心を元にまちあるきツアーのガイドにチャレンジしたり、交流拠点で出会った地域住民たちとの協働機会が増え、活動範囲が広がっていった。後に伊達ルネッサンス塾に入塾し、「これまで批判的な視点でばかり地域をみていたが、本当は自分は丸森町が好きで、丸森町の良さをたくさんの人に知って欲しい」という思いを持っているということに気付き、災害ボランティアで丸森町に来てくれた方々を今度は自分がもてなす側になり、丸森町の良さを知ってもらうプロジェクトを立ち上げた。60代独居で、地域に友達も少なく孤立しがちだったそうだが、「まどいや伊達ルネッサンス塾のおかげで世界が広がり、視野が変わった」と嬉しそうに話してくれた。
課題意識を原動力とした行動は持続性や主体性に乏しくなる場合があるが、純粋な郷土愛を元に行動が変化したことで、地域活動が自分に根ざした前向きで持続可能なものへと変化したプロセスであったと考える。

事例②荒茂美
災害前からPTA活動や教育委員、福祉分野での活動など、地域のキーパーソンとして広く活躍されていた女性だったが、交流拠点に度々来訪するようになり話を聞いていくと、自分に自信がなく、やってみたいことはあるが踏み出せずにいる状態であることが分かった。伊達ルネッサンス塾に誘ったが、「自分には何もできない」と何度も断られ、その度に説得を重ねた結果伊達ルネッサンス塾への入塾に至った。プログラムの中で対話を重ねていくうちに、これまで自分がやってきたことの厚みに気付き、また自分が持っているリソースを洗い出すワークでは、書ききれないほどのステークホルダーがいることが分かり、徐々に自信を持てるように変化していった。これまでは自分のやりたい気持ちよりも、「声をかけられたから協力する」といった姿勢で参加してきたものが多かったようだが、改めて自分は何が楽しいのか、どんなことに関心があるのか、どんな課題意識を持っているのかを考え、自分の思いを明確にしていったことで、自分に根ざしたマイプロジェクトが生まれた。マイプロジェクトができて以降は、本人の主体性が格段に変化し、惰性で続けていた仕事を退職し、自分の夢に向かって生き生きと歩み出した。また、人と話すことが好き、料理を振る舞うことが好き、ということで、地域交流拠点ソーシャルスナックの1日ママも務め、楽しみながら活動できている様子。住んでいる地域の行政区長会に参加し、自分の思いをプレゼンテーションしたり、廃校活用に向けて関係各所に働きかけたりと、主体的かつ積極的な行動を起こしている。本人からは「自分には何もないと思っていたが、こんなにも色々なものを持っているのだと気付いた。子育ても終え、これから改めて自分の人生をどう生きるか考えることができた。伊達ルネッサンス塾に入って良かった」とのコメントをいただいている。これまでは主体性こそ弱かったものの着実に積み重ねてきた活動の軌跡によって、今自分が始めようとしている活動に活かせる圧倒的なリソースが集まっており、コミュニティが狭い地方だからこそ、地域のキーパーソンが主体的に変化することによって大きな変動が生み出せる事例であると考える。

荒茂美さんの発表会の様子。ほとんどの人がパワーポイントを使うなか、自分らしさを活かして手書きの発表資料で望んだ。

③交流スペースの運営
まちづくり交流拠点（地域交流拠点まどい）が認知され、日常的に相談やニーズが持ちかけられたり、復興活動のハブとして機能している
【達成状況】
・活動人材から一般町民までさまざまな人が集い、のべ2,528名以上の利用があった。情報やリソースが拠点に集約され、町民のまちづくりへの興味関心から行動に繋がるきっかけを創出し、実践の場としても活用された。
・丸森町にはこれまで住民が気軽に集える交流拠点のような施設は無く、まどいのオープンと共に地域の利用者からは「こんな場所が欲しかった」「気軽に立ち寄れる場所ができて嬉しい」といった声が多数きかれ、潜在的にニーズがあったことが確認できた。
・日中は誰でも利用しやすいカフェ営業、夕方は18歳以下全品半額の子どもたちを対象とした放課後フリースペース、夜は地域住民や男性を対象としたソーシャルスナックと、1日のなかで時間帯ごとに対象を分け、それぞれに適したサービスを展開することによって世代、性別、所属等に関わらず誰でも利用しやすい仕掛けをつくった。
・狙い通り、昼営業には仮設住宅に住む高齢の女性グループや子育て世代のお母さん、また復興事業のために町外から来ている工事関係者やNPO関係者など幅広く利用された。
・夕方は地元の高校生が集まり、思い思いの時間を過ごしながら拠点にいる大人たちとの関係性を深めたり、まどいが高校生のマイプロジェクトチャレンジの場として利用されることもあった。
・夜のソーシャルスナックでは、一般的に災害復興のサロン活動や日常的な福祉的サービスからこぼれ落ちやすい男性が集まりやすい居場所にしたいという狙いがあり、想定通り独居男性や要支援ボーダーラインの男性など、表面上スナックという形をとっているからこそアプローチが可能になった方々の利用も多く、福祉的重要性と価値を感じる結果となった。

・まどいはリピート率が非常に高く、また拠点運営のなかに関わりしろを多く作っていることから、常連利用者たちが自らまどいの棚や小物を作成してくれたり、自分の所属する町内会に利用を呼びかけてくれたり、アイディアや自らのチャレンジを持ち込むなど、それぞれがまどいによって「地域に関わる小さな一歩」を踏み出す姿や、これまで繋がっていなかった人同士がまどいによって繋がっていく様子が多く見られた。
・まどいが活性化することが地域課題解決に繋がるという、地域交流拠点の価値を理解した上で積極的に利用してくださる地域のキーパーソンも多く、町内会等の利用も多い。
・コーディネート活動では被災者をはじめ既に活動している個人や団体が対象となり、人材育成事業では学びに対して意欲のある層が対象となるが、それだけでは住民主体の復興まちづくり体制の形成には至らない。日常的な交流の場づくりを通じて、これまで地域に対して関心の無かった層や、関心や課題意識を持っていても一歩の進め方が分からなかった層など、これまでの活動では巻き込むことが難しかった対象を巻き込むことに成功したことが、何より大きな成果と考える。
・実際に「地域なんて興味がない」と言っていた若者が、まどいでの交流を通して地域活動に積極的に参加するようになったり、交友関係の狭かった独居男性がまどいで交友関係を広げ、後に発生した地震の際には自主的にボランティア活動を行うなど、無関心な一般住民が災害時にも機能できる人材として変化している姿も見られた。
・一見普通の飲食店として一歩踏み入れた場所が、地域情報に溢れ、楽しい交流が広がり、地域参画の機会が散りばめられている。そんな地域交流拠点が継続的に地域に開かれていくことで、住民主体の復興まちづくり体制が確実に形成されていくものと考える。

(5)-2 評価小項目ごとの評価結果

・評価計画に定めた評価小項目は以下の⑧～⑩である。評価結果は次のとおり。

評価項目	評価小項目	判断基準		評価結果、考察
		判断方法(指標等)	判断基準値(目標値/状態等)	
⑧アウトカムの達	支援対象者のフェーズに合わ	支援対象者の状況変化の把	コミュニティの中から、住	拠点を中心としたこのコミュニティでは、プロジェクトを相互

成度	せた幅広い住民の地域参画の機会を創出し、地域内にチャレンジの連鎖が育まれるコミュニティが形成されているか	握	民主体の課題解決へ向けたPJが生まれている	に応援しあう関係性ができている。
⑨波及効果	当初想定された以外の波及的、副次的な変化はあったか	支援対象者の状況変化の把握	支援対象者に起きた状況変化を把握している	拠点を中心に育まれたコミュニティでは、日常的に復興や地域の抱える課題に対する議論や対話が生まれるようになった。さらにその後に起きた2022年3月の地震に対しても、支援対象者の中からボランティアのマッチングが起こるなど、今後の地域を支える防災ネットワークとしても機能する可能性を感じている。
⑩事業の効率性	類似事業と比較し、効率的な会議運営ができ、情報共有や必要な議論、相談等がしやすい状態であったか	支援者からの外部評価 精算報告書	参加者からの情報共有やニーズマッチングを効率的におこなえた	被災者支援と復興課題の解決のための情報共有と、地域内の連携促進のため、事業開始当初は支援団体や住民へ向けた情報共有会議を実施していたが、想定よりも集客に苦戦したため、復興コーディネートへと計画を変更した。活動人材に対するヒアリングを通じ、支援者は目の前の活動に精一杯でありこうした会議へ出席する余力がそもそも生み出せない状況であるろいう現実も見えてきたことから、 各々の活動を支援し、各セクターを横断的に行き来しながら人と情報を繋ぎ、地域内の連携を促進した。 それによりより直接的かつ効率的なアプローチに繋げることができたと評価する。

(5)-3 成果に関する考察

・復興へむけ孤軍奮闘で活動する人材に対する具体的なヒアリング・相談・マッチングを行うコーディネート支援／活動人材予備軍に対しての講座の企画を通して発掘・活動のサポートを行う人材育成事業／ニーズやリソースが集約され、多世代多業種が集うハブ機能としての拠点運営など、住民のフェーズに寄り添った支援の設計を行うことで復興活動への参画機会を生み出すことができた。

・これは、情報共有と連携促進、人材育成、拠点運営の３つの事業の軸を通じ、さまざまな活動フェーズの住民に対しバランスよくアプローチするロジックモデルを描き、それらが相互に作用したことで、地域全体の復興活動促進の機運を生み出すことができたのだと考える。

・これらにより、住民主体の復興まちづくりにおいて課題であった活動人材の発掘育成が成され、生まれた活動が適切な課題解決能力を維持しながら持続可能な形で自走していくための相互連携や日常的な交流ができる環境整備ができた。これらの基盤があることによって自然と後続する人材が生まれ、活動の中で学び、繋がり合い、さらなる連携によって地域全体の活動力が底上げされることが、復興の担い手の増加へと繋がると考える。未だ復興課題に対して活動人材の数が十分に増えたとは言えないが、好循環を生み出すことができる環境基盤が整備できたことが、本事業の大きな成果であると考える。
・波及効果としても、支援対象者の中から地震後のボランティアのマッチングが起こるなど、今後の地域を支える防災ネットワークとしても機能する可能性を感じている。これは「復興コーディネート」「人材育成」「拠点運営」の三つの軸が連動したことにより生み出せた成果であり、今後個人の思いや考えが具体的な行動へ結びつくようなサポート体制をつくっていきたいと考えている。

４．持続可能性

(１)今後の取り組み
　今後は、拠点運営や講座の収益等をベースとした自己資金を基本軸にして持続可能な形での事業体制に移行していく。事業の方針は変わらず、住民主体の復興まちづくり体制の構築を目指して事業を継続する。

(２)自己資金
(２)-1 契約当初集める予定だった総額　計0円

(２)-2 集められた自己資金の金額と種類　計190,000円

(２)-3 資金調達で工夫した点
　自己資金確保への取組として、有償講座受講生の集客活動、地域交流拠点まどいでの飲食店事業活動（本事業外）、助成金応募検討を行った。飲食店事業活動では、事業経費の大半をカバーできるようになってきたが、コロナによる変動もあり、休眠自己資金として充てられる余裕までは至らなかった。
　人材育成事業においては、講座の価値が伝わるように募集チラシの文言を作成するなど、有料講座であることの意義が理解されるよう工夫して広報活動を行った。

５．広報、外部との連携の実績

(１)メディア掲載（TV・ラジオ・新聞・雑誌・WEB等）

・別紙①　メディア等掲載一覧　リンク

(２)広報制作物・報告書等
・円卓会議　おもて　うら
・2020年発表会　おもて　うら
・伊達ルネッサンス塾塾生募集チラシ　リンク
・2021年発表会　おもて　うら

(３)シンボルマークの活用と方法
・HPに掲載
・拠点/事務所にシンボルマークを掲示

(４)シンポジウム、セミナーなどのイベントの開催等
・2021年12月18日　伊達ルネッサンス塾×MYPROJOURNEY 合同発表会

６．外部との連携の実績

(１)外部との連携の実績
・活動にあたり、以下の計6団体と協働して事業を行ってきた。今後の活動にあたっても、連携していくことが可能となった。

団体名	内容
コネクトフィーリングス	災害後に設立された災害支援団体。定期的に情報共有を行いながら、セミナーの実施や地元団体の防災活動支援等を協働実施した。
まるもり女子重機隊	災害後に設立された団体。防災セミナーの協働実施や定期的な情報交換を行なっている。
丸森役場復興対策室	仮設住宅、被災者支援担当課。仮設住宅での出張まどい等を共に企画実施した。
株式会社ばとん	災害公営住宅でのコミュニティ再建事業受託者。定期的に情報交換を実施。丸森見守り支え合いネットワーク会議を主催しており、継続的に協力予定。
オペレーションブレッシングジャパン	仮設住宅支援担当NPO。定期的に情報交換を実施し、仮設サロンへの参加や出張まどい等を協働企画。
一般社団法人まなびの森	仮設住宅での学習支援担当NPO。定期的な情報交換を実施。

７．教訓・提言

(１)教訓・提言

　当事業の課題設定は「復旧復興活動は現在外部支援団体がその大半を担っており、継続的に活動できる地元住民が著しく少ない」ことであり、事業目的は「長期的な復興まちづくりに向けて、住民の地域参画の機会を創出し、主体的にまちの復興を担うことができる地域の担い手の発掘育成と繋がりの場作りを行うことで、地域内の活動人口増加を目指し、持続可能な復興まちづくり体制を整備する」ことと設定した。2年の事業期間を終え、改めてこの

事業内容が災害大国日本全体の抱える課題に通ずること、その解決策の一手になりうることを実感している。
　丸森町の台風災害では、発災から4ヶ月が経過し、緊急期を終えこれから長期的な復興まちづくりが始まろうとしているタイミングで新型コロナウイルスの感染拡大により、外部支援者の受け入れが全面休止された。それまで町や災害ボランティアセンターには昼夜多くの人が出入りし、手厚い支援体制の中で復興が進むものと誰もが考えていたが、外部支援の受け入れが止まった途端に町は静けさに包まれた。そこからの活動は町内在住者のみとなり、弊社を含め両手で収まるほどの人数での支援活動となり、活動人材の少なさに対して残された山積する復興課題に打ちのめされる日々が続いた。
　当事業では、地域交流拠点の運営によって潜在的担い手の発掘、人材育成事業によって担い手の育成、コーディネート事業によって繋がりと連携の創出という３本柱で事業を展開したが、はじめは10名に満たなかった活動人材も、私たちが直接連携可能になった個人/団体は30件を越え、またそれぞれのステークホルダーも含めれば100名を優に越えるネットワークとなっている。今後も発生し続ける災害において、この活動人材たちが地域を支える力の基礎になっていくことは間違いない。
　一方で、これまでオーソドックスとされてきた「災害復旧復興活動は外部のプロフェッショナルたちが担うもの」という概念そのものが、疑うべきものとも考えられる。毎年災害の発生頻度は増加していくなかで、想定外の新型コロナウイルスの蔓延と、また日本全国が抱える人口減少少子高齢化が今後も深刻化していくことによって、どこの被災地でも支援人材の不足が課題となることは想像に容易い。
　自分の命は自分で守るほかないことと同じように、自分たちの地域は自分たちで守るという姿勢が全国一律に求められると考える。その際に、個人に対する防災教育だけではなく、日常的にどれだけ地域参画の機会を設けられるか、地域人材の育成機関が整っているか、リソースを的確に繋げられる中間支援機能が備わっているかが、今後の地域の生命線となっていくということを、ここに提言したい。

その他

■別添
・事前評価報告後に見直した事業計画（別紙⑥）やロジックモデル（別紙⑦）
・事後評価報告時の事業計画（別紙⑧）やロジックモデル
・ガバナンス・コンプライアンス体制の整備・運用実績の確認リスト（別紙⑨）

■規程類の整備実績
(１)事業期間に整備が求められている規程類の整備は完了しましたか。：**完了**

(２)整備が完了した規程類を自団体のwebサイト上で広く一般公開していますか。：**全て公開した**

(３)変更があった規程類に関して資金分配団体に報告しましたか。：**変更なし**